

分担研究報告書

長崎県油症検診における口腔乾燥に関する研究

研究分担者 川崎 五郎 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 准教授

研究要旨 油症検診において、口腔乾燥の訴えのある患者について、口腔水分計を用いて口腔乾燥状態を測定した。長崎県地区における油症の認定者と未認定者を対象に、問診において口腔乾燥を訴えた患者について測定を行い分析した。口腔乾燥の訴えは43名にみられ、高齢者に多く、性別では女性に多かった。一方測定値に関しては24.4から30.4とばらつきがみられ、測定値と性別、年齢、認定の有無との間に相関はみられなかった。口腔乾燥感と測定値がほぼ一致しているものは12名で、一致率は低かった。

A．研究目的

油症患者における口腔領域の症状として、歯肉および口腔粘膜の色素沈着が主症状として挙げられるが、その他、口腔乾燥症を訴える患者もしばしばみられる。口腔乾燥症は、全身疾患や服用薬によって発現することも多いが、不快感を訴えたり、また結果的に歯科的疾患の原因となりうるため、症状によっては治療を必要とする場合もある。実際には口腔乾燥感を訴えていても、唾液分泌機能に異常はない場合もみられ、口腔乾燥状態を客観的に調べることは重要である。本研究では、歯科検診時に検査者の方から、口腔乾燥感の有無を聞き、訴えのあった患者について口腔水分計を用いた研究を行った。

B．研究方法

平成27年度長崎県地域における油症検診において、通常の歯科検診時、まず最初に口腔乾燥感があるか否かを十分に問診し、乾燥感があった患者について測定を行った。測定は、口腔水分計ムーカスを用い、各人において3回測定を行い、その平均値をデータとして用いた。測定は、舌尖部から10mmの舌背部分で行った。

(倫理面への配慮)

本研究の解析結果においては、個人が特定できるようなデータは存在しない。

C．研究結果

訴えについて、地区別内訳は長崎地区9名、五島玉之浦地区23名、五島奈留地区11名の計43名で、離島地区に多くみられた。性別内訳では男性15名、女性28名で、女性に多かった。認定、未認定別では、認定30名、未認定13名と認定者に多くみられた。年齢は45歳から86歳で、平均72歳であった。年代別では40歳台2名、50歳台4名、60歳台8名、70歳台21名、80歳台10名であった。

対象者全員の測定値の分布は24.4から30.4で、その平均値は27.8であった。項目別の測定値では、性別では男性27.6女性27.8と男女間の差はみられなかった。認定者28.0、未認定者27.1で、両者間に差はみられなかった。地域別では長崎26.9、玉之浦26.9、奈留28.1で地区別の差はみられなかった。

測定値が27未満の者は12名で、認定者および未認定者ともに各6名であった。性別では男性4名、女性8名であった。

D．考察

油症の主な口腔症状としては口腔粘膜の色素沈着であるが、その他にも、歯周疾患、顎関節症、口腔乾燥症、不定愁訴などが報告されており、現在の歯科検診においても、様々な訴えがある。口腔乾燥症は、油症以外でもしばしば認められる症状であるが、以前、動物実験でPCB等の投与により唾液腺に変化がみられており、特に耳下腺周囲には脂肪組織も多く、油症と口腔乾燥との間に何らかの関係がある可能性は否定できない。そこで、今回は、長崎県油症検診において、十分な問診を行い、口腔乾燥感ありとした人について、口腔水分計を用いて口腔の湿潤度を計測し検討した。

口腔乾燥感を訴える人は、高齢者や女性に多く、一般の検診における口腔乾燥感の訴えとほぼ同じであった。認定の有無に関しては、認定者に多くみられたが、認定者、未認定者の母数の違い、および認定者に高齢者が多い傾向にあることが要因と考えられた。

一方、測定値で検討したところ、性別、年齢、認定の有無、地域の各項目とも、測定値に関する有意差は認められなかった。今回は、口腔乾燥感を訴える人のみで検討したが、口腔乾燥感と実際の測定値が一致する人が全体の30%程度であり、不定愁訴のひとつとして口腔乾燥を訴えている可能性もあるため、実際の測定値に差がでなかった可能性もある。しかしながら、口腔乾燥感と測定値が一致しているグループについて検討してみたが、差がみられたのは性別のみであった。服用薬や基礎疾患の有無についても、口腔乾燥症の要因となるため、今後多方面からの検討が必要であると考えられた。

E．結論

油症患者における口腔乾燥症を訴える患者について、客観的に評価を行うために口

腔水分計ムーカスを用いて検討をおこなった。

口腔乾燥を訴える人は、高齢者、女性、認定者に多いものの、測定値では有意差がみられなかった。

F．研究発表

学会発表
なし

G．知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む。)
なし